

Philologie de la civilisation japonaise

Cours du 19 février 2013

L'Anthologie millénaire

Senzai-waka-shû

- La préface -

- *Senzai waka-shû* 千載和歌集
- 後白河 Go-Shirakawa
- 藤原俊成 Fujiwara no Toshinari / Shunzei
- 古来風体抄 *Korai fûtei-shô*
- 釈阿

- やまとみことのうたはちはやぶる神世よりは
じまりて、ならの葉のなにをふ宮にひろまれ
り。

- 997 文屋ありすゑ

神な月時雨ふりおける櫓の葉の

名におふ宮のふるごとぞ

- たましきたひらのみやこにして、延喜のひじりのみ世には古今集をえらばれ、天曆のかしこきおほん時には後撰集をあつめたまひき。白河の御世には後撰集を勅せしめ、堀川の先帝はももちのうたをたてまつらしめたまへり。

- おほよそこのことわざ我が世の風俗として、これを好みてもてあそべば名を世々に残し、これを学びたづさはざるは面を垣にしてたてらんがごとし

- かかりければ、この世にむまれとむまれ、わがくににきたりときたる人は、たかきもくだれるもこのうたをよまざるはすくなし。

- 聖徳太子は片岡山の御言をのべ、伝教大師はわがたつそまのことばをのこせり。
よりて世々のみかどもこのみちをばすて
たまはざるをや

- しなてる 片岡山に 飯（いひ）に餓
（ゑ）て 臥（こや）せる その旅人（た
ひと）あはれ 親無しに 汝（なれ）生
（な）りけめや さす竹の 君はや無き
飯に餓て 臥せる その旅人あはれ

- 阿耨多羅三藐三菩提の仏たち

わが立つそまに冥加あらせたまへ

- 春の花の朝、秋の月の夕、思ひを述べ心を動かさずといふことなし。
- 敷島の道も盛りに興りて、こと（こころ）の泉いにしへよりも深く、ことばの林むかしよりも繁げし。

- ここに今の世の道を好むともがらの言の葉をも聞こしめし、昔の時の折につけたる人の心をも見そなはさむことによりて、かの後拾遺集にえらびのこされたる歌、かみ正暦頃ほひより、しも文治の今に至るまでの大和歌をえらびたてまつるべき仰せごとなむありける。かの御時よりこのかた、年はふたももちあまりに及び、世はとつぎあまりななよになんなりける。すぎにけるかたもとしひさしく、今ゆくさきもはるかにとどまらんため、この集を名づけて千載和歌集といふ。

- そもそもこの歌の道を学ぶことをいふに、からくに日の本のひろき文のみちをもまなびず、鹿の園鷺の峰のふかきみのりをさとるにしもあらず、ただ仮名のよそぢあまりなな文字のうちを出でずして、こころにおもふことを言葉にまかせていひ連ぬるならひなるがゆゑに、みそ文字あまりひと文字をだによみつらねつる者は、出雲八雲の底をしのぎ、敷島大和御言の境入りすぎにたりとのみ思へるなるべし。

- しかはあれども、まことには鑽ればいよいよ堅く、仰げばいよいよ高きものはこの大和歌の道になんありける。
- 春の林の花、秋の山の木の葉、錦色々に、玉声々なりとのみ思へれど、
- 山の中の古木直からざること多く、難波江の蘆をかしき節あることはかたくなんありけれど、
- かつは好む心ざしをあはれび、
- かつは道を絶やさざらんがために、
- 瓦の窓、柴の庵の言の葉をも、
- 見るによろしく、聞くに逆へざるをば洩らすことなし。
- 勅（＝録）してち歌ふたももあまり、はたまきとせり。

- いにしへより勅をうけたまはりて集を撰ぶこと、あるいはその位高く、あるいはその品下れるも、久しくこの道を学び、深くその心を悟れるともがらは勤めきたれる中に、松のとぼそに遁れ苔の袂にしをれたる者これを撰べる跡なむなかりけれど、宇治山の僧喜撰といひけるなん、すべらぎのみことのりをうけたまはりて大和歌の式を作れりける。

- 式を作り集を撰ぶ、かの昔の跡により今このなずらへあるがうへに、和歌の浦の道にたづさひてはななそぢの潮にも過ぎ、わが法のすべらぎに仕へたてまつりてはむそぢになむあまりにければ、家々の言の葉浦々の藻塩草かきあつめたてまつるべきことのりをもうけたまはれるならし。

- しかるに、かの天台止観と申す文のはじめの言葉に、「止観の明清なること、前代もいまだ聞かず」と、章安大師と申人の書き給へるが、まづうち聞くより、ことの深きも限りなく、奥の義も推し量られて、尊くいみじく聞ゆるやうに、この歌の良き悪しき深き心を知らんことも、言葉をもて述べがたきを、これによそへてぞ同じく思ひやるべき事なりける。

- さてかの止観にも、まづ仏の法を伝へ給へる次第をあかして、法の道の伝はれることを人に知らしめ給へるものなり。大覚世尊法を大迦葉に告げ給へり。迦葉、阿難に告ぐ。かくのごとく次第に伝へて師子（＝獅子）に至るまでに廿三人なり。この法を告ぐる次第々々を聞くに、尊さも起るやうに、歌も昔より伝はりて、撰集といふものも出で来て、万葉集より始まりて、古今・後撰・拾遺などの歌の有様にて、深く心を得べきなり。

- ただし、かれは法文金口の深き義なり。これは浮言綺語のたはぶれには似たれども、ことの深き旨も現はれ、これを縁として仏の道にも通はさむため、かつは煩惱すなはち菩提なるが故に、法華経には「若説俗間經書略之資生業等皆順正法」といひ、普賢観には、「なにものか是罪、なにものか是福、罪福無_レ主。我心自空〔ワガココロヲノヅカラムナシ〕なり」と説き給へり。よりにて、いま、歌の深き道も、空仮中の三躰（=諦）に似たるによりて、通はして記し申なり。